

なぜジェイムズ・コノリーは蜂起したのか : 幸徳秋水, 大杉栄と対比して

鈴木, 良平

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

91

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

1994-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004589>

なぜジェイムズ・コノリーは蜂起したのか

——幸徳秋水、大杉栄と対比して——

鈴木良平

1 はじめに——レーニンの評価について

James Connolly (1868～1916) は、現在のアイルランド建国の礎となった1916年の Easter Rising (復活祭蜂起) を、民族主義者の Pearse らと手をたずさえて企て、参加し、失敗して、処刑された社会主義者である。というよりは、第一次世界大戦 (1914～18) という「帝国主義戦争を内乱に転化させよ」というレーニンの有名なスローガンを、1917年にレーニンが実行してロシア革命を成功させたのに対して、コノリーはその一年前に英国の植民地アイルランドにおいて民族独立のための「はやまった」蜂起をして失敗し、処刑された人物である、と言うべきかもしれない。

コノリーらの蜂起そのものは失敗に終わったが、蜂起後の英国側の強引な処刑——とくに足首を負傷して立てないコノリーを椅子に縛りつけて座らせ射殺したやり方が、アイルランド人の対英感情を一変させた。そしてそれ以後アイルランドは急速に英国からの独立にむかって進んでゆくのだから、コノリーらはいわばアイルランド建国の父とも呼ばれうる人物なのである。その点では日本における明治維新の元勳の西郷、大久保らに匹敵する人物であると思われる。と同時に、その蜂起が失敗に終わり処刑されたという点では幸徳秋水や大杉栄に比せられるかもしれない。コノリーの生涯が、幸徳 (1871～1911)、大杉 (1885～1923) の生涯と重なり合う点も見遇いされてはならないだろう。彼らは故意か偶然か、ほぼ同時代の類似した世界的状況の中に生きていた社会主義者なのだから。

ところで、問題は、国籍を持たないといわれる社会主義者ともあろうものが、何故に民族主義者と手をたずさえて蜂起に走ったのか、ということなのだが、コノリーの場合は当時のアイルランドが英国の植民地であったことから、民族独立に関心をもつことは当然のことでもあったのだろう。

ところが昨年、筆者はアイルランドの劇作家ショーン・オケイシーのことを調べていて、コノリーが社会主義を捨てて民族主義に走った男として非難され

ているのを知って驚いてしまったのである。例えば『市民軍物語』には次のように書かれている。

The Labour movement seemed to be regarded by him as a decrescent force, while the essence of Nationalism began to assume the finest elements of his nature……Jim Connolly had stepped from the narrow byway of Irish Socialism on to the broad and crowded highway of Irish Nationalism.⁽¹⁾

コノリーが社会主義者から民族主義者に転向したということであれば、彼が民族主義者のピアスらと手をくんで復活祭蜂起に立ち上がったことが納得できるからだ。

それでは、コノリーが社会主義者にして、ナショナリストという矛盾したような説明は「神話」なのであろうか。しかし考えてみると、コノリーが最後まで社会主義者であったとみなされてきた根拠は、どうやらレーニンの「1916年のアイルランドの反乱」という短い文章にあるらしいのだ。イースター蜂起といえそれは必ず金科玉条、錦の御旗として引用されるのだが、その短い文章の解釈の仕方は必ずしも一様ではない。詳しく論じるには紙幅がないので、国民文庫（大月書店）のレーニンの『帝国主義と民族・植民地問題』中に入っていて、6ページ強なので御一読願うほかないが、ここでは日本で流布しているデーヴィスの本から一つだけ引用したい。

「ある者たちは、コノリーがナショナリズムのために『社会主義を見すてた』かどで、彼を攻撃した。蜂起が時期尚早だったことは、万人の意見が一致した。しかしレーニンは、ちょうどマルクスがパリ・コンミュン参加者たちを非難することをしりぞけていたと同じく、アイルランド蜂起参加者たちを非難するとか悪口を言うことをしりぞけることによって、彼の偉大さを示した。レーニンは、これが『民族的反乱の炎が諸植民地およびヨーロッパにおいて燃えあがった』多くのケースの一つにすぎないということを、はっきり見ていた。『アイルランド人の不運は、ヨーロッパのプロレタリアート反乱がまだ熟していなかったときに、彼らが時期尚早に立ちあがったことであった。』彼はつづけてこう言った——『時期尚早な、部分的な、散在的な、またそれだから不成功におわる、革命的諸運動のなかでのみ、大衆は経験を得るであろうし、知識を獲得するであろうし、力を増すであろうし、彼らの本当の指導者、社会主義的プロレタリアたちを知ることができるであろうし、またこうして総攻撃のための

準備をするであろう。それはちょうど、ばらばらの諸ストライキ、地方的および全国的諸デモンストレーション、軍隊における諸暴動、農民のあいだの諸暴動、等々が、1905年における総攻撃のための道を準備したのと同じ仕方である。」⁽²⁾

このレーニンの文章にはコノリーという名前は出てこない。それでレーニンはコノリーのことも（二人は面識はない）アイルランドの実情も知らなかったのではないか、これは党内むけの議論にすぎない（E, p. 11）という説も出てくるのだが、復活祭蜂起は明らかに民族主義者のIRB（アイルランド共和主義者同盟）を中心とした蜂起であるのに、それがいつのまにか社会主義者コノリーが主導したかのようにすりかえられ、コノリーの名前の出てこないレーニンの一文と結びつけられて、コノリーが立派な社会主義者であるという「神話」が生まれたのではないだろうか。このレーニンの一文が、コノリーの評価に結びつくと考えるのは、あまりにも短絡的であろう。だから、レーニンの一文はコノリー評価にも、アイルランドの社会主義者の戦略・戦術の評価にも、結びつくものではないという意見は妥当だと思う。（F, pp. 155～6）

ところでコノリーのことを少し調べようとして、資料がまったく手に入らないので困りはててしまった。考えてみれば、マルクス・エンゲルス全集が消え失せる時代に、80～100年前に活躍したマイナーな人間の本が、それも小さな政党の機関紙などに書き散らした雑文のたぐいが、今の時代に手に入れるはずもないのだ。わずかに法大の図書館に一冊、以前から持っていたペンギン・ブックの『コノリー著作選集』があるだけ。カタログを見る限りでは、それ以外の本は国会図書館にもどの国立大学の図書館にもない。これは徒手空拳にちかい。やむなく方針転換ということになって、コノリーの思想の遍歴が内面から辿ることができなければ、外面からたどるほかない。それでコノリーとほぼ同時代を生きた、日本の幸徳秋水と大杉栄の二人と対比させることにした。

周知のように、幸徳秋水は1904年の日露戦争に反対の論陣をはり「露国社会党に与えるの書」を書いた。「諸君と我等とは同志也、兄弟也、姉妹也、断じて闘ふべきの理有るなし、諸君の敵は日本人に非ず、実に今の所謂愛国主義也、軍国主義也、我等の敵は露国人に非ず、而して亦実に今の所謂愛国主義也、軍国主義也、然り愛国主義と軍国主義とは、諸君と我等と共通の敵也」。その英訳が「週刊平民新聞」にのって外国に紹介されると、世界中の社会主義者の反響をよび、ロシア社会民主党の機関紙「イスクラ」はただちにそれに答えるメッセージをよせた。そして同年11月の第二インターナショナルの第六回大会にお

いて両国の社会主義政党の代表者ブレハーノフと片山潜との壇上での握手となったのである。1907年には英国労働党の創立者のケア・ハーディが来日して日本の社会主義者と会っているし、大杉栄も1913年に「サンジカリズム研究会」を組織して、サンジカリズムの論陣をはるなど、その時代の日本は意外なほど国際的であったのである。

2 エディンバラ時代——第二インターナショナルの時代の中で——

日本の明治維新の年にジェイムズ・コノリーは英国のエディンバラのカトリック・ゲットーに生まれた。三男で両親はともにアイルランドからの移民であった。そこは19世紀中葉のじゃがいもの不作によるアイルランドの大飢饉で母国アイルランドを脱出したものの、新大陸アメリカにまでたどりつく余裕のない連中が寄り集まってつくった最下層のスラム街だったと言われている。父親は最下層の清掃労働者であり、一家の生活は貧しかった。コノリーは小学校の義務教育化という教育改革の恩恵をうけた第一世代で、(E, p. 14) 10才頃から働きだし、年令をいつわって14才で英国の軍隊に入り、ダブリンにも駐留している。そこで将来の妻 Lillie に出会っている。そして恋人を残して他国へ駐留地を変えられることを恐れて、軍隊を脱走してスコットランドに逃げる。そして Lillie と結婚するが、その間に社会主義者で詩人の John Leslie と知り合い、すでに社会主義者であった兄ジョンの影響もあってマルクス主義に目覚めてゆく。やがてエディンバラに戻り、社会主義者の大同団結の団体である SSF (スコットランド社会主義者同盟) に入り、兄ジョンの後をうけて書記となり、機関紙にレポートなどを書くようになる。

この頃のコノリーの面影をケア・ハーディの伝記本から二つ引用してみよう。ケア・ハーディはスコットランドの西海岸地方出身の炭鉱夫であり、コノリーより12才ほど年長で、若い頃は主としてグラスゴウで活躍していた。

「コノリーは気性の烈しいアイルランド人で、貴族や資本家はこっぴどく打倒すべしと狂信的に思いこんでいて、しょっちゅう警察と喧嘩をしているアイルランドの志士だった。」

もうひとつは、88年の炭鉱夫の年次大会でハーディがスコットランド労働党の結成を呼びかけた後のことである。

「非妥協的で熱火のようなアイルランドの反逆者ジム・コノリーだけは同意しかねるというのだった。『労働者が必要とするものは労働党じゃないんだ』と彼は断言した。『それはただ一つの可能なやり方で、資本家階級の転覆を誓

う革命政党だ。ただ一つの可能なやり方というのは、バリケードを築き、労働者を武装させ、暴力で工場を奪取するやり方さ。他にやり方はないんだ。君がここでそいつをやらんというのなら、さっさとアイルランドへ帰っちまうぜ、僕は。」⁽³⁾

一読して異端的なほど過激なコノリーの姿が思い浮かぶであろう。それに対してハーディは自由党員やノン・ポリ労働者の得票を欲していたので、党名に socialist という名称を入れることを避けたのであろう。

1893年にはコノリーは創設されたばかりの独立労働党のエディンバラ支部の党員にもなっていた。そして94年、95年と二度も市議会議員選挙に SSF から立候補するが、落選する。社会主義者として党派を明らかにして立候補したせいもあって、コノリーはそれ以後エディンバラでは職につけず、貧窮のあまり南米のチリへの移住を決意するが、先輩の Leslie の口ききで機関紙に広告を出すと、幸いにもアイルランドの Dublin Society Club が有給のオルガナイザーとしてコノリーを雇ってくれることになった。それで96年5月にコノリーは妻子をつれてダブリンに移住し、28才にして職業革命家の道を歩むことになったのである。

以下、第二インターナショナルのことを少し書きたい。コノリーの活躍した時代は、ほぼ最初から最後まで第二インターナショナル（1889～1914）の時代であった。第一インターは1876年に崩壊し、マルクスは83年に死んでいた。そして第二インターは、フランス革命百周年を記念して、1889年7月14日にパリで、マルクス主義者を中心に創立されたものであった。

ところで第二インターの時代は帝国主義の時代でもあって、この間、先進資本主義国では労働者の数が急増し、労働運動が発展していった。まず、各国で社会主義政党が設立されていった。1869年にドイツで、ついで70年にオランダ、71年にデンマーク、76年にアメリカ、79年にフランスとスペイン。⁽⁴⁾ 英国ではハーディ創設のスコットランド労働党が89年、独立労働党は93年に結成されている。また、71年に英議会で労働組合法が成立し、労働組合が合法化されていた。⁽⁵⁾ アイルランドでも94年にアイルランド労働組合評議会（TUC）が設立されたが、それは英国からの自立志向によるものではなくて、英国で開かれる全国大会に代表団を派遣する費用がないから、分離・独立するという経済的要因のせいであった。⁽⁶⁾

更に、労働者に選挙権が与えられるようになった。英国とアイルランドでは1884年、アメリカでは70年に白人男性のみに、ドイツでは71年、スペインが84

年、ベルギーが93年。(F, p. 2) そして、理念としては、第二インターは資本主義社会は、社会主義政党を産婆役として、不可避免的に破滅すると信じていた。生産力の発展が生産関係の変革をもたらすのだから、人類の歴史は必然的に社会主義へ向かうように、前もって決定されているのだ。(F, p. 3)

具体的には、宣伝、教育によって労働者が社会主義に目覚めることによって、社会主義政党の候補者への得票数は高まるはずであった。選挙に当選して議会に入り、やがて多数派を占めれば、ブルジョアの権力構造を内部から変えることができ、社会主義を達成できるのだ。それ故に各国の社会主義者は、議会で多数派を占めることが要請された。そのような「政治行動」を拒否するアナキストは93年の第二インターの第三回大会において排除されてしまったのである。(F, p. 4)

3 ダブリン時代——第二インターからの脱却へ——

1896年ダブリンに到着してすぐにコノリーは Irish Socialist Republican Party (ISRP) を組織して、書記となった。(労働者としては社会主義をめざす) Socialist にして Republican (共和主義者、つまり、英国と手を切って民族の完全独立をめざすナショナリスト) という、矛盾するというか、水と油のような異質なものが同居するところに、アイルランドの特殊性と、コノリーの独自性があるのかもしれない。作家は「処女作の中にすべてがある」と言われるが、コノリーの場合もこの最初の党の中にすべてがあったとも言えよう。

綱領の冒頭は、次のように書かれてあった。

「 目的

土地と生産・分配・交換の手段をアイルランド人が所有することによって、アイルランド共和国を樹立すること。(以下略)

主張

ある階級による、土地や生産・分配・交換手段の私的所有は、正義という重要な原理と対立するものであり、民族的、政治的、社会的、あらゆる抑圧の基盤となっている。

アイルランドが英国王の権威に服従しているような、一つの民族の他民族への従属は、抑圧された民族の自由な政治的、経済的発展の障害であり、両民族の搾取階級の利益になるだけである。」(H, pp. 132~3)

ISRP は、時代にさきがけたものであったせいか、小さな政党であったが、努力して創設二年後には機関紙 *Workers' Republic* が発行できるようになった。コノリーはその編集・発行を担当した。資料不足もあって、ここでデーヴィスの文章をもう一度引用することをお許し願いたい。

「われわれは社会主義者であるがゆえに共和主義者なのである」と、コノリーは1898年『労働者共和国』の第一号に書いた。彼は、政治的独立は同時に国の資源がアイルランド人民の手に渡るのでなければ、外国資本の権力への新たな卑屈という結果になりかねないということを、十分に悟っていた。彼は政治的帝国主義におとらず経済的帝国主義に反対であった――

もし諸君が明日イギリス軍を一掃してダブリン城のうえに緑の旗をかかげるとしても、諸君が社会主義共和国の組織にとりかかるのでなければ、諸君のもろもろの努力はむなしいことになるであろう。(中略)

社会主義ぬきの――古代エリン（アイルランドの古名）の基礎となっていた共同的所有のより広くかつより発展した形式にもとずいて社会を組織しなおすことをぬきにした――ナショナリズムは、民族的臆病でしかない。⁽⁷⁾ なお、最後の引用文は1897年の *Socialism and Nationalism* からのものである。

そして、97年にはヴィクトリア女王の即位50周年の祝典がおこなわれたが、コノリーは祝典反対のデモを組織、指揮して逮捕されている。ヴィクトリア女王の治世に対するコノリーの文章を引用しよう。

During this glorious reign, Ireland has seen 1,225,000 of her children die of famine, starved to death while the produce of her soil and of their labour was eaten by a vulture aristocracy……the eviction of 3,666,000, a multitude greater than that of the entire population of Switzerland; and the reluctant emigration of 4,186,000 of our kindred, a greater host than the entire people of Greece……our streets are thronged by starving crowds of the unemployed. Cattle graze on our tenantless farms and around the ruins of our battered homesteads, our ports are crowded with departing emigrants, and our work-houses are full of paupers. Such are the constituent elements out of which we are bade to construct a National Festival of Rejoicing.⁽⁸⁾

なお、97年にはコノリーは最初のパンフレット *Erin's Hope* を出版している。やがて、このわずか8ページの機関紙『労働者共和国』はアイルランドはもと

より、英国、はては遠く海をこえたアメリカでも読まれるようになった。そして、アメリカの社会主義労働党（SLP）の指導者 DeLeon が彼らの機関紙に載せるために、コノリーの原稿を求めてきた。それで98年アイルランド西部にまたじゃがいもの不作が生じると、コノリーは三週間にわたって西部地方に行き、農業問題の実態を調べ、その報告をデ・レオンの機関紙にのせた。それ以後 SLP の機関紙と ISRP の機関紙が、相互に党内で配布されるようになった。（F, p. 57）

99年8月にボーア戦争が勃発すると、コノリーを先兵として ISRP は反戦運動を組織した。しかし、コノリーは単に感覚的に反応しただけではなかった。

「科学的、革命的社会主義は、資本主義が発展の極に達した時に、初めて社会主義が実現されうるものであることを教えている。したがって産業の未発達な国が産業資本主義段階へと発展することは望ましいことである。というのもこのような国においては、そのよな発展こそが革命的プロレタリアートを生むのであり、社会主義運動が急速に成功するために不可欠な政治的自由をもたらずからである。そして植民地拡張や新しい市場の征服は、資本主義の延命にとって欠くべからざるもので、イギリスのような先進資本主義国の植民地拡張を妨げ、市場を喪失させることは、経済危機を促進させることであり、その結果、革命思想に刺激を与え、後進国の発展に必要な時期を短縮し、私たちの勝利に必要な経済的諸条件を準備することにもなるのである。」（『帝国主義と社会主義』（H, pp. 27～8）

この引用文の前半は第二インターの路線、ないしは初期のレーニンに忠実な思考だと思えるが、後半は植民地の労働者に民族の独立を達成するための思想的根拠を与える、コノリー独自の思想のように思える。とりわけ「イギリスのような先進資本主義国の植民地拡張を妨げ、市場を喪失させることは、経済危機を促進させることであり、その結果、革命思想に刺激を与え」という箇所は、後年のイースター蜂起のための大義名分そのものであろう。コノリーは第一次世界大戦ではむしろドイツの勝利を望んだくらいなのだから。1900年9月のパリでの第二インターの第五回大会に ISRP は、英国の政党から分離・独立した政党として、二人の代表団を派遣した。コノリーも代表団に選ばれたが、金がなくて参加できなかった。その大会ではフランスの社会主義者がブルジョア内閣に入閣したことが問題にされた。ISRP は左派の立場を堅持して、「そんなことは議題にしない」と言う中央派のカウツキーの決議案に反対した。（A, p. 14）

そして帰国後の ISRP の報告会では、次の1904年の第六会大会でカウツキーの決議案が撤回されなければ、ISRP は第二インターから脱退することが決められた。(E, p. 42) このような ISRP の強硬な姿勢の背後には、アメリカ SLP のデ・レオンの影響があったと言われている。(B, p. 42) だが、英国流の議会主義の政党に、コノリーがアメリカ社会主義労働党のマルクス主義を押しつけようとしたために、党派争いが生じて (G, p. 49)、1903年にコノリーがアメリカに去ることになり、1904年にならないうちに ISRP は分裂して、消滅してしまったのである。

筆が進みすぎた。話を元に戻すとして、ISRP は資金不足のために機関紙の発行も何度か中断された。コノリーは資金稼ぎをかねて、SDF (英国のマルクス主義団体) のあちこちの支部を講演旅行をしてまわった。

1902年1月には、ダブリン市議会に社会主義者として立候補したが落選した。カトリック教会はコノリーを「反キリスト者」と呼び、信者はコノリーに投票してはならないと猛烈な圧迫をかけてきた。だが、2月には前年に出版された *Erin's Hope* がアメリカで、サンディカリズム (組合主義) を受け入れて改訂されて出版された。更にコノリーはアメリカの SLP によってアメリカを講演してまわるように依頼された。(C, p. 141) というのは、1899年に SLP は分裂して、穏健派の Socialist Party が設立されていた。それでコノリーがアメリカに来れば、在米アイルランド人を組織しようとするデ・レオンの立場は強化されるからだ。(C, p. 147) アイルランド系アメリカ人はすでに400万人もいたし、毎年4万人ほど増えてゆく見込みだった。それで8月にコノリーは渡米し、半年ほどニュー・ヨーク、ロサンジェルス、はてはカナダにまで講演旅行をしてまわった。

1903年1月に帰国するとコノリーは7月にはスコットランに SDF (英国のマルクス主義団体) から分離した Socialist Labour Party を創設した。しかし、木に竹をついだようなもので、その新党もうまくいかなかった。ISRP も党資金をめぐる争いなどで分裂し、コノリーは生活できなくなって、9月に単身でアメリカへ行かざるをえなくなった。見送り人は一人もいなかったと言われている。

この間、コノリーより三才年下の幸徳秋水は何をしていたのか。まず、年表を見てみよう。

1898年 (明治31年) 27才「万朝報」に入社。社会主義研究会を結成。

- 1899年 師岡千代子と結婚。普通選挙期成同盟会の結成に参加。
- 1901年 処女作の『廿世紀之怪物帝国主義』を出版。社会民主党を結成するも即日禁止さる。
- 1903年 『社会主義神髓』を出版。日露戦争に反対して万朝社をやめ、平民社を創設。
「週刊平民新聞」を創刊し、社会主義協会の本部を平民社に移す。
- 1904年 「平民新聞」に「与露国社会党書」を発表。幸徳・堺共訳の『共産党宣言』を平民新聞に載せる。新聞は発売禁止で幸徳らは罰金刑をうける。社会主義協会が解散を命じられる。⁽⁹⁾

30代の前半にして幸徳はすでに主著を二冊も書いているのだ。それも世界にさがかけてのことなのに驚かされる。団体の解散、新聞などの発禁が目立つ。英国の植民地アイルランドでさえ労働組合の機関紙などが発売禁止になるのは、第一次世界大戦が勃発して半年ほどして厭戦気分が広まってからのことだ。幸徳、大杉の殺され方といい、「富国強兵」の日本では基本的人権というか市民的自由の主張は完全に抑圧されたのだ。

4 アメリカ時代——サンジカリズムの洗礼——

アメリカのニュー・ヨークでのSLPの歓迎会は盛大なものだった。コノリーは早速アイルランド系移民の間をまわって、選挙の際にはSLPに投票を依頼する講演旅行をした。だが、期待していたSLPの機関紙では働けず、労働組合員証がなかったのでニュー・ヨークでは働けなかった。

この時期のアメリカの状況を示すために、幸徳秋水の研究家として名高い糸屋寿雄氏の文章の一節を借用させていただく。

「幸徳の在米当時、アメリカには社会主義労働党(1877年結党)と社会党(1901年結成)の二派がたがいに対立していた。デ・レオンの指導する社会主義労働党は26州に合計五、六千名の黨員を持っていたが、その圧倒的多数は、外国生まれ……であった。デ・レオンのセクト的、独裁的な指導に対して党内の不満がたかまり、……一派が分裂し1901年アメリカ社会党が結成された。

当時のアメリカの労働運動は……アメリカ労働連盟(A. F. L.)が五十万人以上の組合員を有していたが、……幹部は……腐りはてた階級協調の常套手段にしがみついていた。この恥ずべき反動と腐敗に対する戦闘的労働者の反抗として生まれたのが、1905年(明治38)6月にシカゴで創立された世界産業労働組合(I. W. W.)であった。はじめ、この組織は、左翼社会主義指導者デブス、

ヘイウッド、デ・レオンらによって指導されていた。……I. W. W. は、その第一回大会のときの綱領に、サンジカリスト的非政治主義の特徴があらわれており、……この修正案はデ・レオンによってつくられたもので、彼自身は半ばサンジカリストであった。」⁽¹⁰⁾

DeLeon (1852～1911) はレーニンに匹敵するほどの才能の持ち主であったと言われている。コノリーより16才の年長でヴェネズエラの沖合の、オランダの植民地であった小さな島に生まれ、父親はオランダ軍の医者で、母親は現地の中南米の女性らしい。20才でニュー・ヨークに出て、その学校でギリシャ語、ラテン語、数学を教え、それからコロンビア大学法学部に入り、卒業後は現場で働いた後に母校の国際法の講師になる、という大変な才人なのだ。しかし、ニュー・ヨークのストライキに同情して、90年に社会主義労働党に入党したので、大学を解雇された。やがて SLP の指導権をにぎり、機関紙の編集長となって、左派の立場からキャンペーンをはった。同時にマルクス、エンゲルス、カウツキーなどの著作を翻訳した。(D, pp. 90～91) また、1898年のキューバをめぐるスペイン・アメリカ戦争では、アメリカの植民地支配を非難してむしろアメリカの敗北を歓迎した。(F, p. 57)

このようなデ・レオンの姿勢が、翌年のボーア戦争に対するコノリーの姿勢と似ていることは偶然ではないだろう。

ところで、アメリカに来てすぐにコノリーはそのデ・レオンと衝突してしまうのだ。デ・レオンのマルクス主義の解釈はあまりにも機械的で、決定論的であった。彼にとっては社会主義は科学の法則であり、政党の役割は単にこの科学の法則を労働者に提示するもの、と彼は信じていた。(F, p. 59) デ・レオンにとっては政党の方針と労働者の意識とを結びつけるための戦略などは必要なかったであろう。

コノリーは SLP の「賃金、結婚、教会」に関する見解に不満を抱き、党の機関紙に手紙を書いた。それをデ・レオンが反論したが、その後はコノリーの発言は封じこめられてしまう。デ・レオン派の主張は「賃金引き上げのためのストライキ闘争が、結果的に労働者による闘争の成果を台無しにするので、資本主義を廃止するための革命的行動なくしては、会社側と労働条件を（実質的には）改善できない」⁽¹¹⁾ というものだった。しかし、コノリーには、もしデ・レオン派の主張通りだとすれば、政党や労働組合の存在は必要ないものになってしまう、と思われた。(F, pp. 59～60) 現に、SLP の組織した組合は、幅広い労働者の結集をめざしたはずなのに、SLP への支持は衰えていた。

結婚と教会（宗教）に関しては、驚くべきことに SLP 内では乱交と無神論が認められていた。カトリック信仰を背景に育ったコノリーにとっては、どちらも耐え難いことであった。それに対してアメリカはピューリタンの伝統のあるプロテスタントの国であった。しかしながら、近年の移民はイタリー人やアイルランド人などのカトリック教徒が多かった。カトリック教徒は狂信的だとみなされていた。「カトリシズムは左翼陣営においては、一般に『保守反動の代名詞』のように考えられてい」⁽¹²⁾た。だからコノリーのようにカトリック教徒でありながら革命家であるということは、信じがたいことであった。

でも、まだこの段階ではコノリーはデ・レオンから離れなかった。すでにフランス語とドイツ語とをマスターしていたので、この間彼はイタリー語を学んだ。1904年8月には家族も移住してきたので、また共に生活できるようになった。

1905年には前述のごとく I. W. W（世界産業労働組合）が結成されるが、I. W. W は議会の多数派を占めて国家権力をにぎるという平和革命論にあきたらず、次第に労働組合のゼネストなどの直接行動によって国家権力をにぎろうとするサンジカリスト派が強くなっていった。I. W. W に加入したコノリーも当然サンジカリズムの影響をうけた。

サンジカリズムとは、すべての労働者は「一つの大きな組合」に所属すべきであり、その組合を、資本主義から社会主義へと国家権力を変えてゆく（組合の経済力によって社会の経済的な根源を攻撃することによって）革命の道具・手段とみなすというものであった。労働組合はまず最初に労働者に教育やイデオロギーを与え、しかる後に組合がゼネストによって国家権力をにぎる、というものであった。それ故、労働組合は組合として労働者を保護すると同時に、政治的には戦闘的な団体であるという、二重の役割をもつことになる。⁽¹³⁾ コノリーは1908年出版の *Socialism Made Easy* の中で次のように書いている。

The real battle is the battle being fought out every day for the power to control industry, and the gauge of the progress of that battle is not to be found in the number of votes making a cross beneath the symbol of a political party, but in the number of these workers who enrol themselves in an industrial organization with the definite purpose of making themselves masters of the industrial equipment of society in general. (A, p. 159) (*The Future of Labour* より)

つまり、コノリーは、第二インターの典型であった、選挙時に労働者の投票を獲得するための投票箱 (ballot-box) としての政党ではなくて、労働者の職場での日常闘争の重視というか、労働者の直接行動のために組合に加入せよと訴えているのである。

そして、労働組合員の二重の役割り、すなわち、(1)選挙の際には市民として資本主義の政治体制を攻撃する勢力に投票し、(2)労働組合員としては、やがては政治体制を転覆させる経済力を創りだすことを助ける、ことを主張している。(A, pp. 161~2)

もうひとつ、同じ *Socialism Made Easy* から引用すると、

What the Socialist does realize is that under a special democratic form of society the administration of affairs will be in the hands of representatives of the various industries of the nation; that the workers in the shops and factories will organize themselves into unions, ... that said union will democratically control the workshop life of its own industry, electing all foremen etc. .. that representatives elected from these various departments of industry will meet and form the industrial administration or national government of the country. (*Industrial unionism and constructive socialism* より) (A, pp. 150~1)

ここには社会主義社会の理想像として、社会の管理権が民主的に選ばれた労働組合の代表者の手中に入る、などと書かれているが、やはりそのための方法論などは一切考慮されていない。まったくの空想的社会主義なのである。

ここで幸徳秋水のことにふれると、このような時期に幸徳はアメリカにやって来たのである。幸徳は1905年になると、前年の『共産党宣言』の訳載がたたって「平民新聞」は発行停止処分をうけて、やむなく廃刊になり、また別の筆禍事件などがあって、編集人として禁固五カ月の刑をうけ2月に入獄した。獄中でクロボトキンなどの著作を読み7月に出獄した。「小生ハ初メ『マークス』派ノ議会主義者トシテ監獄ニ参リ候モ其ノ出獄スルニ際シテハ過激ナル無政府主義者ト相成テ娑婆に立戻リ申候」⁽¹⁴⁾という有名な手紙を幸徳は残している。10月には平民社も解散され、失意のうちに友人からのカンパの金で11月にアメリカへ半ばは亡命の旅に出た。ところがアメリカでは大歓迎をうけ、失意の気持ちは一瞬にして吹き飛んでしまったのである。アメリカでの幸徳の行動は糸屋氏の研究書に日記ふうにつぶさに記されているが、幸徳自身が書いた『平民主義』(1907年、明治40年出版、即日発禁)の中の「桑港より」に詳しく書かれてい

る。それは『日本の名著 幸徳秋水』（中央公論社）に入っているので、幸徳の行動については一切省略する。ただし、その本に言及すれば、全体が「社会主義」、「非戦論」、「思想と趣味」、「下獄と外遊」、「撃石火」と分かれていて、幸徳が「平民新聞」などに書いたものをまとめたものだが、即日発禁になるだけあって、その主張はするどい。コノリーなどと比べても決して劣るものではない。かの「露国社会党に与える書」も含まれているし、1906年の帰朝演説として名高い「世界革命運動の潮流」ではゼネ・ストが論じられている。「ゼネラル・ストライキは、世人の想像するようなむつかしいことではない。1874年、スペインのアルコニールにおける、86年のアメリカにおける、……大ストライキの事例は、あきらかにゼネラル・ストライキが、将来の革命において、権力階級を戦慄させることのできる最上の武器であることをしめした。」また「日本移民とアメリカ」や「在米同胞は幸福であるか」などの文章は、今は経済大国になった日本の、過去の姿を蘇らせてくれて、涙をそそるものがある。

もっとも、幸徳以前に片山潜が1903年暮れに、「在北米日本人を組織する……目的で渡米、……日本人社会主義者を援けて社会主義演説をなし……日本人桑港社会党を創立し、また各地で『社会主義協会』支部を組織した」⁽¹⁵⁾のであるが。そして結成されたばかりのIWW（世界産業労働組合）は、腐敗したAFL（アメリカ労働連盟）の、黒人や英語のしゃべれないアジア人に対する人種差別を廃止して、それまでスト破りとみなされてきた中国人や日本人労働者をIWWに取り込むために積極的に働きかけていたのである。（F, p. 66）幸徳は渡米してすぐにアメリカ社会党に入党するが、やがて「アメリカには、たんに社会党と名づけるのと、『社会労働党』というのとが、二派にわかれて対抗のかたちになっている」ことに気づき、社会労働党の本部に訪ねてゆく。「わたくしは、サンフランシスコにおける労働組合の日本人排斥運動に対し、社会党労働者がどんな態度をとるか、を質問してみたが、彼らは、みな日本人に同情し、非常に排斥運動に反対していた。社会労働党の人びとは……あらたに「世界労働者同盟」という革命的労働運動をおこし、……さかんに運動している。この組合は、その名のしめすように、まったく世界的で、人種的偏見などは、すこしもない。」（「桑港より」（その四））とデ・レオンの社会労働党とIWWを評価しているのである。前述した賃金制度をめぐるデ・レオンとコノリーの論争も知っていて、「けれども、ほくに二者その一を選ばせるならば、ほくは、理想的・革命的・急進的であることを欲している。」と書いている。

そして、帰国直前に日本人を50余人集めて「社会革命党」を結成し、綱領を

起草した。

幸徳の留守の間に（1906年2月）日本社会党が結成されていた。幸徳は帰国するとただちに日本社会党の歓迎演説会の席上で「世界革命運動の潮流」と題して演説し（前述のごとく『平民主義』に所収されている）、ゼネ・ストによる直接行動を主張した。

他方、滞米中の幸徳からバクーニン全集を贈られて感激した、14才年下の入獄中の大杉栄は、すでに「万国社会党略史」を書いていたが、幸徳に追隨して翌年「欧州社会党運動の大勢」を「平民新聞」に書いて、幸徳をバック・アップした。

「我が日本に見るに、嘗ては議会政策を以て唯一の革命運動なりとなし、何人も之れに対して些の疑問を挟まざりしが、遂に幸徳氏出でて議会政策の愚と弄とを絶叫するに至れり。予も亦、予の革命的社会主義の立場より、議会政策は寧ろ社会革命の氣勢を弱むるものとなし、而して、労働者の直接行動によらざれば、到底社会革命を全うし得可らずと信ずるに至れり。」

この頃、1906年から7年にかけて日本でも労働者の直接行動が激発している。呉海軍工蔽スト暴動化、大阪砲兵工蔽スト、足尾銅山の鉍毒事件は田中正造の天皇への直訴状（幸徳が代作）提出だけでは収まらず、坑夫が暴動化し鎮圧のために軍隊が出動している。同じく、幌内炭鉍争議、別子銅山暴動にも軍隊が出動している。夕張炭鉍スト、生野鉍山スト、等々。⁽¹⁶⁾

西欧諸国において第二インターからサンジカリスト（アナキスト）が排除された時期に、逆にアメリカにおいてはサンジカリストがIWWを乗っ取るのであり、このような時期にコノリーや幸徳がアメリカにいたということは、彼らの今後の行動を規制するという点では重大なことであった。

ところで、1907年になるとIWWとSLPの関係をめぐってまたデ・レオンとコノリーとが対立するようになった。コノリーは主としてアイルランド人やイタリー人（ともにカトリック教徒が多い）からなる1万2千人ほどの沖仲仕の団体をIWWに加入させようとしたので、IWW内でのSLPの影響力の低下、逆に言えばIWW内でのカトリック系のコノリーの勢力が強まること、を恐れたデ・レオンが反対したからだ。

そのうえ、コノリーはSLPの機関紙の編集者になれなかったので、アイルランド系の労働者を組織して「アイルランド社会主義者連合」(ISF)を設立し、その機関紙の編集長になった。それが分派活動とみなされた。コノリーは労働運動を崩壊、分裂させようとする「ジェズイット教団の手先」とみなされるよ

うになった。(D, pp. 134~5) それでコノリーは1907年に SLP を脱退した。

翌8年、IWW はマルクス主義者のデ・レオンを中心とするデトロイト IWW と、サンジカリストの直接行動派のシカゴ IWW に分裂する。⁽¹⁷⁾ コノリーはサンジカリスト派のシカゴ IWW の大会に出席した。翌9年には SLP と対立する党派の社会党に加入し、全国オルグとなってアメリカ中を講演旅行してまわった。

丁度この頃、母国アイルランドで新しい動きが出てきた。ゲーリック連盟、アイルランド文芸復興などがナショナリズムをかきたてていた。1905年に結成された Arthur Griffith らの Sinn Fein (我等のみ) 党が勢力を増してきた。シン・フェイン党が一番有力な勢力に思えたコノリーは、シン・フェイン党と社会主義者が民族の自主独立の原則を共通の基盤として、合体することの可能性を論じる論文をアイルランドの雑誌に書いたが、ダブリンの友人たちは誰もコノリーの見解を相手にしなかった。シン・フェイン党のグリフィスは明らかに労働者階級に関心がなかったし、ナショナリストやシン・フェイン党の連中はしばしば「情け容赦なく貧乏人の膏血をしほりとる」からだ。また、民族独立という理念は社会主義者の課題から気をそらすものだし、労働者は民族主義の「緑の旗」では賃上げはできないということを知っていた。だからコノリーの提案など論外だった。(D, p. 156)

5 帰国——ダブリン・ストライキ——

1910年コノリーが米国から帰国する頃までには、ラーキンがアイルランドの労働組合の様相をすっかり変えてしまっていた。James Larkin (1876~1947) は英国リバプールの生まれだが、両親はコノリー同様にアイルランドからの移民であった。ラーキンも貧しく育ち、ろくな教育も受けず、11才で働きだしている。リバプールの波止場で働いていた時に National Union of Dock Labourers (NUDL) に加入し、いつのまにか頭角を現していた。情熱的な大男で、弁舌にすぐれていた。やがて労働組合の専従となり英国の各地に派遣され、ついにベルファーストからダブリンへやって来たのだった。⁽¹⁸⁾

その当時のダブリンの経済界は、英国からの輸入品と価格競争をするために安い労働力を必要としていた。⁽¹⁹⁾ また、アイルランドの労働者の多くが未熟練労働者で、給料は安く、そのくせ失業率は高く、いつ解雇されるかも分からず、互いに仲間の労働者を自分の職を脅かす競争相手とみなして足を引っ張ることが多かった。団結して経営者側と闘う力などはとても弱かった。⁽²⁰⁾ このよ

うな状況のダブリンへ1907年に31才のラーキンが NUDL の職員としてやって来たのだ。当時のダブリンはコノリーが *The re-conquest of Ireland* の付録でも示しているように、死亡率、トイレなどにおいて世界でも最悪のスラム街だった。

ラーキンは、そのような民衆の悲惨な生活を少しでも改善したかった。それで1909年ラーキンは従来の職能別組合の壁を打破して、熟練労働者と未熟練労働者とを一緒にした「一つの大きな労働組合」である「アイルランド運輸・一般労働者組合」(ITGWU) を結成し、みずから総書記となった。それはサンジカリズムの思想にもとづく組合であった。それがアイルランドにおける労働組合の政治的方向を変えた。

このような状況の中に42才のコノリーは帰国したのである。彼はただちに獄中のラーキンを訪ね、旧友オブライアンの党である Socialist Party of Ireland (SPI) に入党し、全国オルグとなった。その党にアメリカ仕込みのサンジカリズムを注入することを期待して。

コノリーは帰国してすぐに、在米中に書きあげた主著二冊を出版している。一冊は、*Labour, Nationality and Religion* (A所収)、もう一冊は *Labour in Irish History* である。前者はジェズイット会の神父の攻撃に対する反論として書かれたもので、アイルランドの近代史が革命運動の歴史としてとらえられ、社会主義とカトリックの教義が必ずしも矛盾するものではないと説かれている。後者はサンジカリズムの色彩を感じさせるもので、アイルランドの歴史をマルクス主義的史観から描いたもの。最終章「労働者階級」の結論ともいべき部分でも、

the Irish toilers henceforward will base their fight for freedom, not upon the winning or losing the right to talk in an Irish Parliament, but *upon their progress towards the mastery of those factories, workshops and farms upon which a people's bread and liberties depend.*⁽²¹⁾ (イタリックは引用者)

と、はっきりとサンジカリズムの思想がのべられている。

現実に戻るとして、最初はラーキンとコノリーの間柄は必ずしもしっくりいかなかったが、1911年に労働運動が高まりをみせると、コノリーのような有能な人間を放置するわけにもいかず、7月コノリーはITGWUのアルスター支部の書記兼オルグに任命された。すぐに彼は、労働者の政治教育の場として Independent Labour Party of Ireland (ILPI) の設立を提唱した。コノリーの理念によれば、ゼネ・ストなどの直接行動をおこなう労働組合 ITGWU を真ん中に

して、組合員の政治宣伝用の政党 SPI と、選挙時の投票箱としての（議会用の）政党 ILPI が必要になる。（G, p. 25）しかし、現実にはコノリー提唱の ILPI はしばらくして SPI を吸収するかたちで形成された（G, p. 67）のであるから、三つの団体が揃うということはなかった。だが、死の前年の15年に出版された *The re-conquest of Ireland* は、最終章で都市労働者の農業協同組合員などとの共闘を訴えたりしているので、ILPI のための行動計画書であった、（B, p. 98）とも言われている。

しかし、その ILPI は大きな政党にはなれなかった。「アイルランド自治法案」が英国側から提示され、北アイルランドのプロテスタント過激派はその法案にあくまでも反対し、13年には「アルスター義勇軍」を設立した。宗派間の対立が激しくなり、特にコノリーのいたベルファーストなどは労働組合員はカトリック教徒が多かったので、プロテスタント過激派の攻撃をうけたりして、物情騒然とした雰囲気になっていたので、ILPI は活動できなかったからだ。この時期、サンジカリズムを明確に説明する手紙をコノリーは友人に書き送っている。

Syndicalism is simply the discovery that the workers are strongest at the point of production, that they have no force available but economic force, and that by linking the revolutionary movement with the daily fight of the workshop, mill, shipyard and factory the necessary economic force can be organised. Also that the revolutionary organisation necessary for that purpose provides the frame-work of the Socialist Republic. (B, p. 95)

ついでに、1913年に日本初の「サンジカリズム研究会」を設立した大杉栄のサンジカリズム論をすこし聞いてみよう。大杉にはサンジカリズムを論じたものとして、「生の創造」、「個人主義者と政治運動」、「労働運動とプラグマティズム」、「ベルグソンとソレル」などがあるが、ここでは「生の創造」から引用しよう。

「サンジカリズムは言う。社会主義は定命的組成 *le devenir fatal* ではない。任意的組成 *la formation volontaire* である。労働者が優越なる精神的教化の程度に達せざる限り、社会主義の経済的変革は実現せられない。新しき道徳は現在の社会の中に創られねばならぬのだ。そしてこの新道徳の力が、新しき社会状態を可能ならしめるのだと。……そしてこの『労働者みずからの仕事』とい

うところに、サンジカリズムは、自由と創造とを見いだしたのである。」紙幅がないので満足な引用もできないが、前後にマルクスやエンゲルスの言葉がちりばめてある。ソレルがその典型だが、その当時はまだサンジカリズムとマルクス主義が平和共存していたのである。

1913年のダブリン・ストライキは、ラーキンの ITGWU つぶしのために資本家側によって仕掛けられたものであった。それは8月から翌年2月まで半年も続き、警官隊の暴行により二人の労働者が死ぬという「血の日曜日」事件があったりするのだが、一切省略する。山場は英国の労働者が、ラーキン主義の「同情スト」に立ち上がってくれるか否かの時であった。

「同情ストとはなにか。それは団結が不可欠であることを労働者が承認することであり、兄弟の闘いはわれわれの闘い、姉妹の困難はわれわれの困難であって、われわれは互いに仲間同士であることを、日常の労使関係において表明することである。実践的にいえば、それは、ある労働者の団体が雇用者と係争中である時、その他の労働者が商品の取り扱いを拒否することで、彼らに協力し、特定の雇用者にもものの道理を悟らせようというものである。」(H, p. 63)

だが、英国の労働者はついに全面的には同情ストに立たなかった。代わりに食料をつんだ船を送ってよこしただけだった。

結局、ダブリン・ストライキは ITGWU の敗北に終わり、ラーキンは資本家の圧力に屈して、渡米するという形で辞任せざるをえなかった。彼の後を継いだのがコノリーであったが、スト敗北後は組合員の数も減り、ITGWU の勢力も衰えていった。ストの唯一の成果といえば、資本家に雇われて暴力をふるう「スト破り」に対抗して、労働者を保護するための Irish Citizen Army (ICA) が13年11月23日に設立されたことであろう。だが、それは労働者階級の組織であって、その二日後に IRB (アイルランド共和主義者同盟) を中心に「アイルランド義勇軍」が設立されるのだが、それはアイルランド人の自由と権利を獲得し、維持するために、「アルスター義勇軍」に対抗するための中産階級のホワイト・カラーの組織であった。(D, p. 243) 両組織はついに合併されることはなかった。

6 第一次世界大戦の勃発——第二インターの崩壊——

14年3月、英国首相アスキスは「アイルランド自治法案」の最終案を提示した。その法案では北アイルランドが除外されることになっていた。つまり、自治領となる南アイルランドと、英国から分離しないで英領のままに残る北アイ

ルランドと、アイルランドが二つに分割されることになるのである。コノリーにとっては、アイルランドの分割は労働運動の分割を意味していたので、とてもその法案を受け入れることはできなかった。

Such a scheme would destroy the Labour movement by disrupting it. It would perpetuate in a form aggravated in evil the discords now prevalent, and help the Home Rule and Orange capitalists and clerics to keep their rallying cries before the public as the political watchwords of the day. In short, it would make division more intense and confusion of ideas and parties more confounded. (A, p. 276)

その法案の英議会通過はアイルランドの労働者にとっては、前年の「同情スト」拒否について、英国の労働党と労働組合の二度目の裏切り行為を意味した。英労働党は議会でその法案に反対しなかったからである。

さらに、8月には第一次世界大戦が勃発した。それは第二インターに属する西欧諸国の社会主義政党の裏切り以外のなにものでもなかった。1907年の第七回大会以来の「戦争反対の決議」は無視されたのだ。

「戦争の合図が同時に革命の合図であるべきだったと、またラッパが実戦の開始を合図したときその合図が社会革命の警鐘とされるべきだったと信じている私たち」「ヨーロッパのすべての交戦国の社会主義プロレタリアートは、国境を越えて兄弟国に進軍するのを拒否すべきであったし、また内戦になったかもしれないが、それを拒否すれば戦争や戦争の恐怖を完全に防止することができただろうと私は信じているのである。」（「革命的労働運動と戦争」15年3月）（H, pp. 78～9）

このような箇所を読めばコノリーはレーニン主義者であった、と言いうるかもしれない。（C, p. 353）しかし、ひとたび戦争が始まってしまうと、「私はイギリスが完全に敗北するのを見たい。そうすれば海上貿易はすべての民族——大国も小国も平等に——に開かれることになるだろう。」（H, p. 81）「もし、ドイツ軍が明日にでもアイルランドに上陸するとして、私たちがそれに加わることで、不本意ながら私たちをこの戦争に引きずり込んだイギリス帝国との関係をきっぱりと絶つことができるならば、それはまったく正当なことになるだろう。」（H, p. 69）こうなるとこれは完全に「英国の危機はアイルランドの好機」というIRB（アイルランド共和主義者同盟）の伝統的な考えと同じで、まさに

復活祭蜂起の論理そのものであろう。現に、コノリー、ピアスらはドイツ軍の侵攻と武器の援助を期待して蜂起の計画をねり上げるのであるから。

多くの研究書は、コノリーは第一次世界大戦が始まって、ナショナリストに変わったと指摘している。(B, p. 122, D, p. 262, E, p. 10.) Joseph Lee は、

Connolly was cured of his illusion that socialist solidarity could prevent international conflict. He decided, in effect, that the road to socialism lay through nationalism.⁽²²⁾と書いているが、コノリーに好意的な見方といえよう。

7 蜂起へ——ナショナリストとともに——

世界大戦が勃発して約一ヵ月後の9月上旬にコノリーは早くもピアスらのIRBの過激な民族主義者と会っている。(B, p. 123) IRBは1852年に設立された古い愛国団体だが、1907年ニュー・ヨーク帰りのClarke(復活祭蜂起の仕掛け人)によって近年勢力を増していた。もうひとつの民族主義団体のSinn Feinは軍事的には対英戦争をあきらめていて、英国王が英国とアイルランドの二つの国を統治する二重王権を認めていたが、経済的な自立をめざしていた。それに、IRBとシン・フェインでは13年のラーキン率いるダブリン・ストライキに対する姿勢が異なっていたのである。IRBのピアスらはストライキに同情的な立場をとったインテリの一団だったが、シン・フェインのグリフィスのような中産階級のナショナリストは、英国とアイルランドの資本家の区別をしないラーキンが嫌いだったし、ストライキにも同情しなかった。(F, p. 181) 従って、コノリーにもよい感情をもたなかった。(そのくせ皮肉にもイースター蜂起の成果を掠めとったのは、シン・フェインだったのだ。)

それに、辞任したラーキンの後をうけてITGWUの総書記、その機関紙の編集長、そしてアイルランド市民軍(ICA)の司令官という、いわば陸、海、空の三軍の長になりながら、コノリーは打撃をうけた組織の再建に全力をつくすというよりは、IRBとの協議のほうが忙しいのだ。その後はすべてIRBにお任せになって事態は進んでゆく。

もっとも、コノリーは労働組合から排除されていた、という説もある。彼は頭が高いというか、他人の気持ちや分からない人間だったらしく、若い時から常に同僚とトラブルをおこしていたらしい。渡米する時も、帰国の時も、蜂起の時も。(D, P. 291)

それでは、コノリーはなぜ蜂起する気になったのか。Morganは(1)ダブリン・ストライキの失敗(2)南北アイルランドの分割(3)第二インターの崩壊

(4)大戦がナショナリストに好機を与えたこと、をあげているが、(E, p. 134) 戦争がすすむにつれて組合の機関紙が名称を代えても次々と発禁にされ、市民的自由が奪われてゆくことにコノリーは不安を感じてもいたのだろう。

けれども、コノリーには大虐殺の戦争のなかで、内乱・革命をおこさねばならぬという社会主義者としての義務感というか、大義に殉じる気持ちがあった、という人もいる。(G, p. 89) とにかく最後までコノリーには、書かれたものから判断して、労働者意識があったことは確かである。中産階級の IRB の連中とつきあえば、よけいにみずからの労働者としての意識を感じたにちがいないのだ。それだけに、ホワイト・カラーの IRB が蜂起したとしても、労働者が協力して蜂起し、ともに血を流してくれるだろうか、という不安にコノリーはとりつかれていた。(D, p. 283)

IRB にしても、まったく勝ち目のない蜂起を企てていたわけではなかった。アイルランドの英兵と警官は約16,000人。アイルランド義勇軍が全国で18,000人ほど。それで武器・弾薬がドイツからくれば蜂起は半年くらいもつだろう。コノリーは英軍は自分たちが築きあげた都市ダブリンを攻撃しないだろう、と言った。(D, p. 295) 世界大戦が早く終われば、蜂起軍は事実上のアイルランド共和国として和平会談の席につけるだろう。だが、すべては砂上の楼閣だった。アイルランド義勇軍は中立を守って立たず、ドイツからの武器は届かなかった。

注

James Connolly の生涯などは、主として下記の文献によった。

- (A) F.B. Ellis, ed., *James Connolly. selected writings* (penguin books, 1973)
- (B) Ruth Dudley Edwards, *James Connolly* (Gill and Macmillan, 1981)
- (C) C.Desmond Greaves, *The life and times of James Connolly* (Lawrence and Wishart, 1961)
- (D) Samuel Levenson, *James Connolly A Biography* (Martin Brian & O'keeffe, 1973)
- (E) Austen Morgan, *James Connolly A Political Biography* (Manchester University Press, 1988)
- (F) Kieran Allen, *The Politics of James Connolly* (Pluto Press, London, 1990)
- (G) Bernard Ransom, *Connolly's Marxism* (Pluto Press, 1980)
- (H) 堀越智、岡安寿子訳『アイルランド・ナショナリズムと社会主義——ジェイムズ・コノリー著作集——』(未来社 1986)

なお、本文中の()内の記号 A, B, C などとは上記の文献に対応するものである。

- (1) Sean O'Casey, *The Story of Irish Citizen Army* (The Journeyman Press) p. 52
- (2) H. B. デーヴィス(藤野渉訳)『ナショナリズムと社会主義』(岩波書店) pp. 220
- (3) ジョン・コックバーン(永田正男、宇佐見道雄訳)『ケア・ハーディの小説風伝記』(中央公論社 昭和41年) p. 107とp. 134
- (4) フォスター『三つのインタナショナルの歴史』(大月書店 1957) p. 141
- (5) Andrew Boyd, *The Rise of the Irish Trade Unions* (Anvil Books, Ireland, 1972) p. 67
- (6) Ibid., p. 72
- (7) デーヴィス、同書 pp. 210～1
- (8) K. Griffith & T. E. O'Grady, *Curious Journey An Oral History of Ireland*
Unfinished revolution (Hutchinson, London, 1982) pp. 4～5
- (9) 糸屋寿雄『幸徳秋水研究』(青木書店 昭和42年)
「日本の名著」伊藤整(神崎清)編『幸徳秋水』(中央公論社 1984) 両著作の年表による。
- (10) 糸屋 同書 pp. 213～4
- (11) 久田俊夫『アメリカ・サンジカリズムの群像』(未来社 1993) p. 15 (12) 同書 p. 69
- (13) Charles McCarthy, *Trade Unions 1894-1960* (Institute of Public Administration, Dublin) p. 18
- (14) 糸屋 同書 p. 202 (15) 糸屋 同書 p. 207 (16) 糸屋 同書 年表より。
- (17) Paul Frederick Brissenden, *The I. W. W. A Study of American Syndicalism*
(Columbia University, New York, 1919) p. 219
- (18) F. S. Lyons, *Ireland since the famine* (Collins/Fontana, 1975) p. 276
- (19) William Irwin Thompson, *The Imagination of an Insurrection*, Dublin Easter
(The Lindisfarne Press, U. S. A. 1967) P. 82
- (20) *Divided City portrait of Dublin 1913* (curriculum development unit Dublin)
- (21) James Connolly, *Labour in Ireland* (Dublin) p. 167
- (22) Joseph Lee, *The Modernisation of Irish Society 1848-1918* (Gill and Macmillan, 1975)
p. 150
- (23) Joseph Lee, p. 154

なお、サンジカリズムと幸徳秋水、大杉栄に関しては、本学の相良匡俊、西田勝
両教授の御教示ならびに資料提供をうけました。記して謝意を表します。

また、本稿は平成四年度法政大学特別研究助成金の成果であることを付記します。